

「授業改善のための学生アンケート」2017年度後期 顕彰授業における工夫


2018年5月1日

白百合女子大学 FD 推進委員会

2017年度後期「授業改善のための学生アンケート」の顕彰授業における工夫をご紹介します。授業のあり方は授業の数だけありますが、顕彰された授業における工夫を知ることにより、よりよい学びのためのヒントが得られる機会になればと願っています。

【参考】 顕彰の対象となったアンケート項目は以下の9項目です。

- Q3 この授業に主体的に取り組むことができましたか。
- Q4 この授業の内容を十分に習得できたか。
- Q6 教員の話は聞き取りやすかったですか。
- Q7 教員の説明の仕方はわかりやすかったですか。
- Q8 教科書や配付資料など、教材は適切だったか。
- Q10 学生の質問や相談に対して、教員は適切に対応していたか。
- Q11 教員の説明や指示は教室全体に正確に行き届いていたか。
- Q12 この授業の目的や到達目標を十分に理解できましたか。
- Q13 この授業の内容に興味を持つことができましたか。



少人数部門

「ドイツ語ⅠB」 小川 泰生（基礎教育センター） 2017木3通

1 自己紹介について

ドイツの17世紀にヨハン・ゼバスティアン・バッハという、誰もが知っているバロック音楽の作曲家がいます。バッハはドイツ語で「小川」という意味なので、僕はいつも最初の授業で僕を「バッハ」先生と呼んでくださいね！と挨拶するようにしています。ただそれだけで、学生たちとの距離感が縮まり、親近感を抱かれる存在として受け入れられるようです。もちろん、挨拶の仕方そのものは個人の自由なのですが、私の場合、自分の方から具体的に受け入れてもらう姿勢を示すことが、大切なように思われます。

2 授業の進め方と説明の仕方

初めてドイツ語を学ぼうとする人が、ドイツ語の基本を無理なく学習できるように、時間の許す限り、消化しやすいようにゆっくりと進み、ていねいに説明し、わかりやすい授業を目指します。どう説明すればわかるか、あるいはわかりやすいか、それを常に工夫し試行錯誤しながら進めています。それゆえ、関係代名詞や接続法のようないくらか難解な項目は、2年生になってからやるようにしています。

説明の仕方についてですが、それは実際には授業参観していただくしかないのですが、具体的にひとつだけ例を挙げてみます。たとえば、ドイツ語の動詞と助動詞のいわば引力は、英語の場

合と反対に、離れれば離れるほど強くなり、たいてい、第2位の動詞または助動詞は文末の要素を一番強く引き付けます。このようなドイツ語表現における特有の引力の法則を、たとえば、人生でも故郷は離れれば離れるほど思いが募りますし、あるいは、恋人同士なら、遠距離恋愛に観るように、離れれば離れるほど会いたくなりますね、といったふうに、文法上の内容をできるだけ生活上の具体例をもって説明するように心掛けています。

3 テキストや映像について

初級ドイツ文法を踏まえて、ドイツ語圏とその生活や文化を紹介するやさしいドイツ語のテキストをゆっくりと読み進めています。それは単に訳読するための練習ではなく、内容を把握できているかを問うための読解です。テキストに付録の映像は、美しく臨場感あふれるドイツの市井の姿を映し出しています。学生たちに映像を見せながらテキストの問いに答えてもらうことで、考察と発見の楽しみを経験してもらいます。授業ではこのようにテキストに即した映像をよく用いますが、それ以外にも興味深いドイツ映画の鑑賞などときどき採り入れています。たとえば、ケストナーの『ふたりのロッテ』や、ヨハンナ・シュピーリの『アルプスの少女ハイジ』といった、ドイツ語の作品の映画化されたものなどです。


4 「百聞は一食に如かず」

クリスマスを準備するアトヴェントの時期に食べる「シュトレン」というドイツのパン菓子があります。真っ白に砂糖でくるまれたシュトレンは、「キリストの揺りかご」や「キリストのおくるみ」などの説があります。授業でもこの時期にその話をしますが、しかし私の味気ない話だけではつまらないので、私の授業では、ドイツパン屋さんで買い求めたシュトレンを、学生たちと一緒に味わう機会を持つのです。それは決して学生たちへの胡麻すりではないのです。「百聞は一食に如かず」という、具体的な恵みを味わう瞬間を共有したいのです。まるでキリスト教のミサで用いるホスチアをいただく気分なのです。けれども、いつも一方的に私の方から提供するとは限らないのです。というのは、ある年度の学生たちは、私の誕生日をいつのまにかメモしていたらしくて、アトヴェントが来る前の11月の私の誕生日に、あのシュトレンを教室に持参して私の誕生日会を祝ってくれたのです。こういう時には、ほんとうに学生たちとの出会いの恵みを感じます。

5 授業以外の話について

授業はもちろんまじめに行ないませんが、それでも授業だけではなく、授業の合い間にいくつもの話をさせてもらっています。学生たちは、優しさや優しさにつながる話が好きなようです。別の大学の話ですが、おお暴れして突進してきた男子学生を最終的に赦したという出来事や、片方の足首を切断されたびっこの鳩を、「片足ちゃん」と呼んでかわいがっている話など、その他多くの体験談がありますが、ここにはそれ以上具体的に書き記すことはできません。要するに、学生たちは、愛が感じられる話に飢えているような気がします。





多人数部門

「創作文化研究Ⅱ」 やた みほ（人間総合学部児童文化学科） 2017 金 3 後

「創作文化研究」は映像を扱った授業で、前期は映像に声をあてたり簡単なドラマを作ったり、役者さんにゲストにいらしていただきながら進めました。後期は「〇〇にチャレンジ！」というテーマのドキュメンタリー番組、ミュージックビデオ制作などを進め、実際にパソコンで編集をしてもらいました。

この授業の目的でもある「地域との交流活動」として 11 月末にはせんがわ劇場で「白百合おたのしみ劇場」を企画しました。参加者を募ったところ 20 名近い学生が希望をしてくれ、出演担当（司会、ナレーション、踊り）、裏方担当（受付、当日の記録）と幅広く分担できました。当日は近所の保育園、幼稚園の子どもたち、ご近所の乳幼児親子など、せんがわ劇場の方々の宣伝のお陰でたくさんの地域の方々が来場。プログラムには、学生が授業で作ったドラマ、ダンスを取り入れ、子どもたちも楽しそうに踊ってくれました。

こうした、授業での活動、作品がイベントに生かされるということが学生たちのやる気、満足感につながったのかと思います。また、この授業に際しては多くの方にご協力をいただきました。管財課では機材のレンタル、教務課では教室変更などの対応で毎回お世話になりましたし、「白百合おたのしみ劇場」は劇場のスタッフの方々、演出家さん、役者さん、事務局室の方々などのお力なくしては実現できませんでした。そして、学生出演に対してご理解を頂いた児童文化学科の先生方、助手さん。皆さまにこの場をお借りして御礼申し上げます。



白百合女子大学 FD 推進委員会